



人と環境にやさしいトランジットモデル都市をめざして RACDA

第181号

2018 / 9

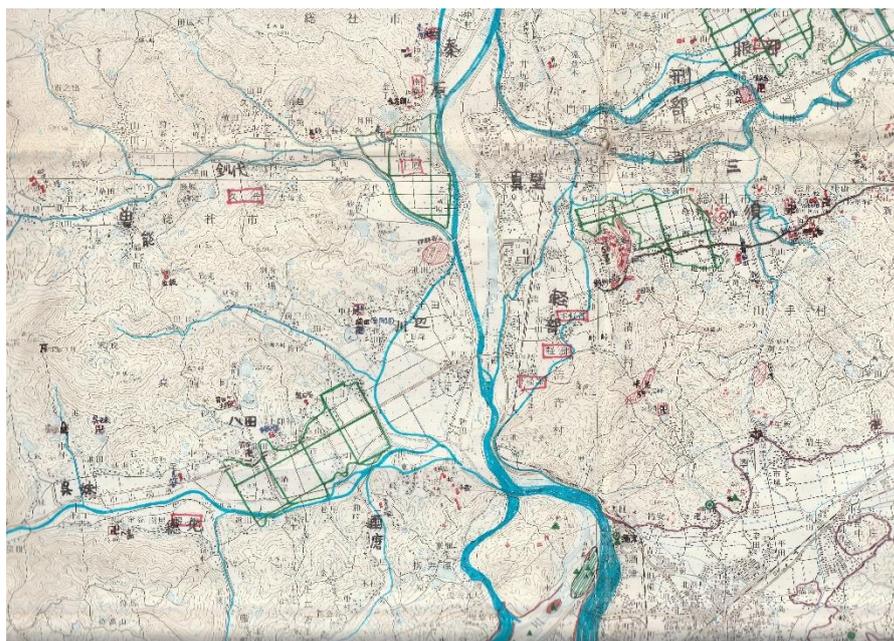
災害も交通も地域力の勝負 自然も人も憎まず、知るのみ！

■右図は真備を含めた古代の遺跡地図を昭和49年に個人的に作成したものだ。古墳の多くは浸からない山際に作られている。古代から高梁川と小田川の合流点は氾濫原で、真備でも川の渡しのある川辺宿以外にはあまり集落がない。しかも川辺宿には「神楽土手」という集落を囲む輪中土手が明治にはあった。

■正方形の区画は奈良時代の条里制という計画された田んぼの区画の跡である。奈良時代には現在の総社市街地、旧清音村、真備の東半分には田んぼもない。

■高梁川の分流が総社の北から東に流れて服部、足守方面にも流れている。大洪水の後には、高梁川の主流は大きく東の備中高松から庭瀬・中庄方面から吉備の中海に流れていたことは何回もあるはずだ。

■一方古墳の多い赤磐市の旧山陽町から瀬戸、邑久の砂川、吉井川の遺跡地図を見てみよう。これも44年前の地図で作ってあるが、今回氾濫した砂川の平島あたりには条里制の遺構はなく、湿地帯もしくは遊水池の機能だったことがわかる。瀬戸内市側の邑久町、長船町あたりも古墳は山際にあり、集落もほとんど山際だ。邑久の東の山際には「後背湿地」があり、今でも洪水時には深



NPO 法人公共の交通ラクダ(RACDA)

事務局 〒700-0823 岡山市北区丸の内 1-1-15 禁酒会館 3F TEL&FAX 086-232-5502

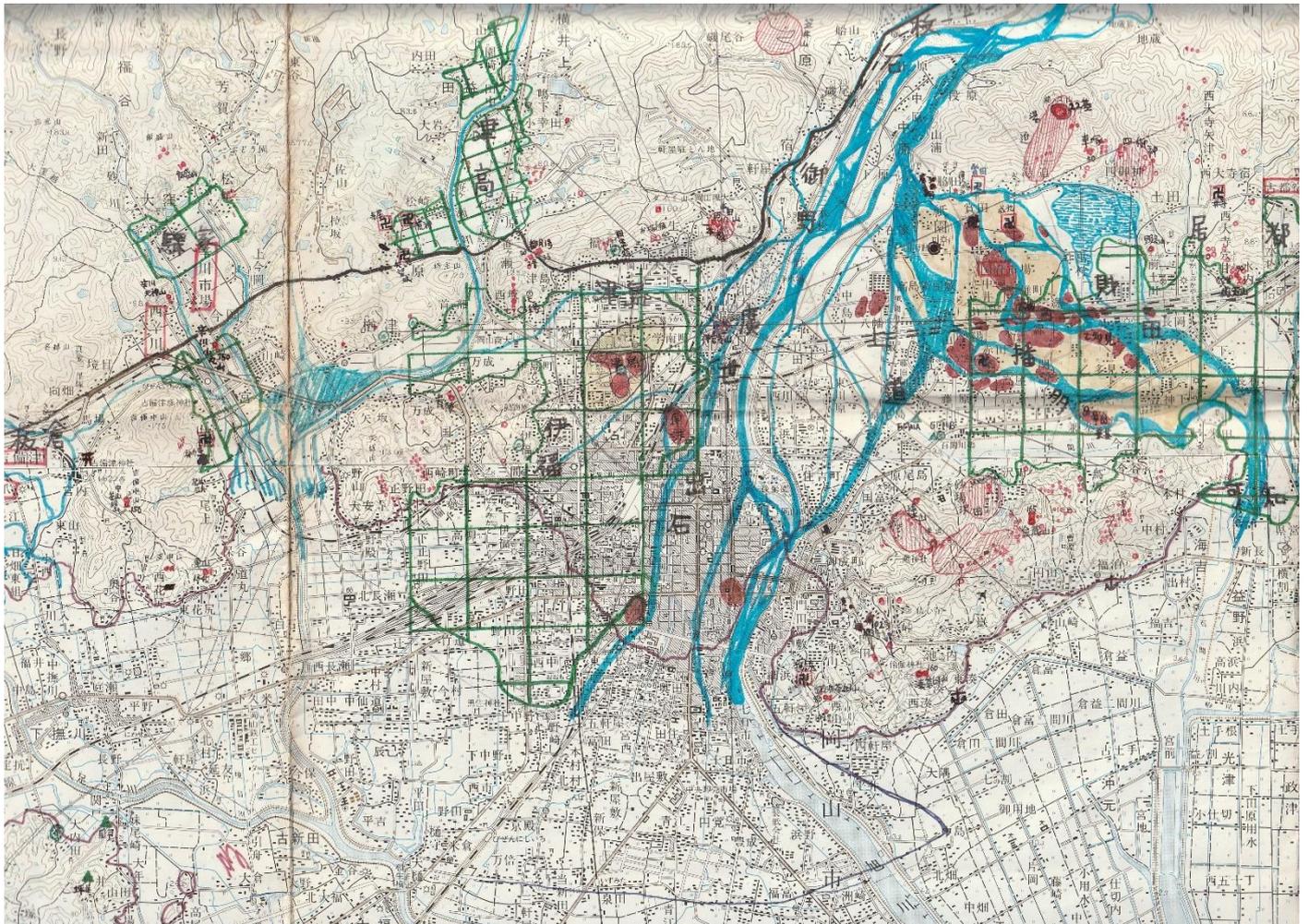
E-mail: info@racda-okayama.org

URL: <http://www.racda-okayama.org>

RACDA

検索





く浸かる。千町平野という広大な田んぼは、同時に巨大な遊水池でもあった。

■さて我々の住む岡山平野の旭川を見てみよう。弥生時代の初めには岡山平野はほとんど海だったが、度重なる水害でどんどん埋まり、約2000年間で200cmは土砂が堆積していないところはない。岡山県運動公園の改修時に発掘された津島遺跡には、そうした洪水で倒壊した家屋がそのまま展示されている。考古学博物館は洪水の歴史を語る施設であることを知って欲しい。

■旭川の名前の由来は「浅いひの川」だと言われている。昔吉備の国は「ひのくに」と言われ、そこに流れる浅い川だという。遠浅の吉備の中海が児島との間に広がり、それを旭川と吉井川が埋め尽くし、江戸時代には池田家が大々的に干拓し、最後は戦後の干拓もあってこれだけの豊かな平野ができあがった。津島から西南方向には早くから安定した水田ができて、条里制も残っていたが、岡山市街地の中央部は石山・岡山・天神山の島があるものの、常に水害に見舞われる地域だった。

■旭川の東側、龍ノ口山と操山の間には多くの弥生時代の遺跡があり、奈良時代の条里制が残り、地下の旭川は今も「雄町の名水」として流れている。比較的安定した地域だが、壮大な洪水の跡地である事は間違いない。国土交通省岡山河川事務所が出す「百間川小史」を見れば、江戸時代以来の水害との戦いが見える。1654年の大水害で備前藩は大打撃を受け、30万人の内3000人が餓死したという。水害そのものの死者は300人ほどだった。この経験から藩主池田光政、綱政、郡代津田永忠によって百間川が開削される。百間川は元々の洪水時の氾濫原を元に、旭川の放水路として建設され、合わせて砂川など複数の川の洪水調節、干拓地の水源確保も狙った。当時も岡山城下町を守る為には、遊水池の百間川の田んぼが浸かっても、補償した方が得だと判断している。実は旭川と百間川の分流部の「荒手」という越水土手を1m以上上げる強化改修工事がつい最近完成し、これが今回岡山市街地を洪水から守った可能性がある。

■こうした自然の河川の歴史を知っておけば、現代の我々にも重要な判断基準となる。岡山は災害がないのではなく、洪水の跡地に作られた地域なのだ。弥生時代から豊かな水に恵まれる一方、洪水の脅威と戦い続けた歴史があるのだ。こうした地域の細かい事情が分らなければ、防災も地域の公共交通も上手くコントロールは出来ない。大きすぎる自治体ではなく真備、上道くらいの旧市町村単位で避難勧告指示を出すためには、地域コミュニティの再生が急務だ。(岡将男)